表紙, 目次, 通信, 雑報

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38077

十全會雜誌

第二十一卷
第四號
（第百二十三號）

金澤醫學專門學校十全會

大正五年四月一日發行

十全會雜誌

十全會雜誌第二十一卷第四號（第百二十三號）目次

○原著及實驗

●淋毒性副尿管炎ニ就テ。
Über die Paraurethritis gonorrhoica.
醫學博士　土肥章司

●古賀氏液療法ハ化學療法ニ非ラス。
ドクトル　竹中繁次郎

●二三ノ蛋白質分解酵素ノ作用ニ就テ。
Über die Wirkungen der einigen proteolytischen Enzyme.
醫學士　田村昌

○學位論文

●石森國臣。●兒玉豐治郎。●森田齊次。

○通信

●高橋隆三氏通信。●中島理吉氏通信。

○雜報

●圖書月報。（其拾八）　醫科四年　南兵太郎

○叙任及辭令

●內閣。●陸軍省。●海軍省。●石川縣。

○人事

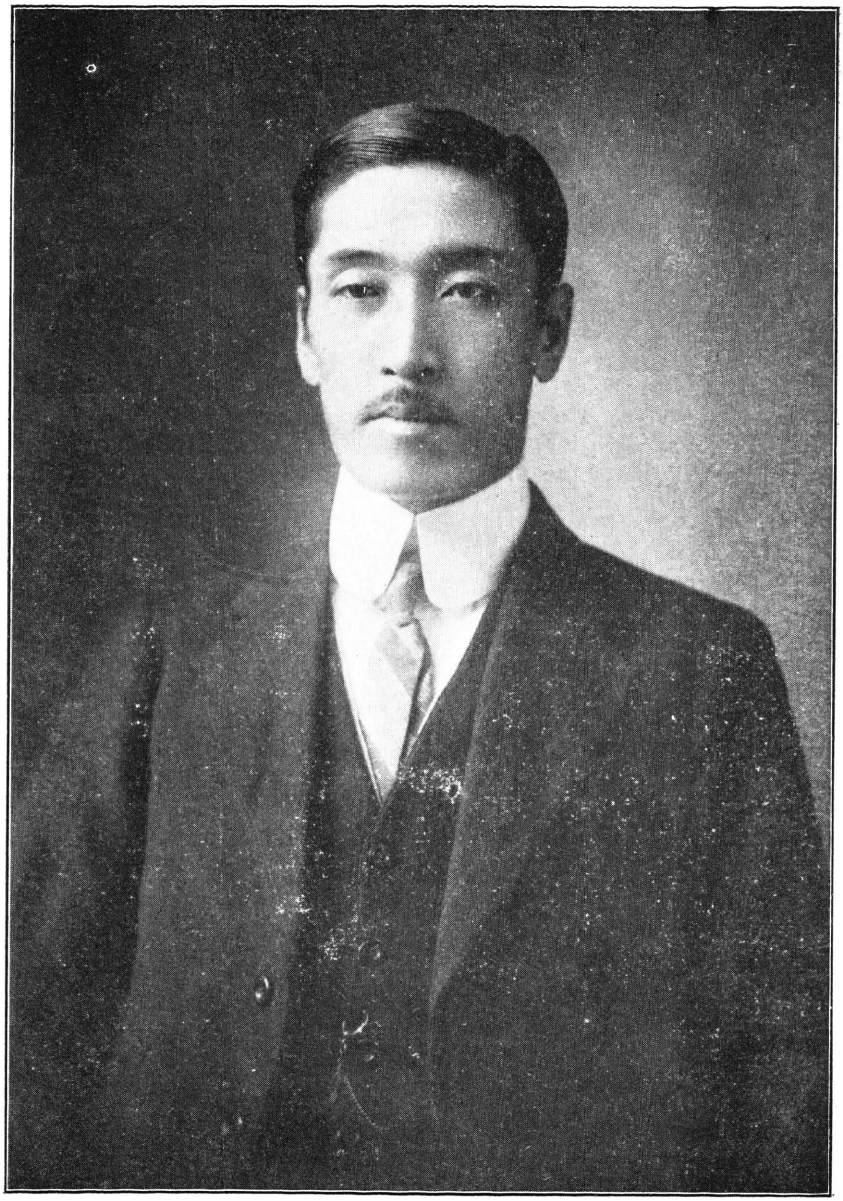
●北村誠吾氏。●田村惣七氏。●大前猴次氏。

○會告

●創立二十五年記念館寄附金第二十回報告。

○廣告

●山碕教授在職貳拾年祝賀會寄附金第四回報告。
●山碕教授在職貳拾年祝賀會寄附金報告正誤表。
●上田教授在職記念品贈呈醵金第四回報告。
●金子博士在職參拾年祝賀會趣意書。
●金子博士在職參拾年祝賀會寄附金申込第二回報告。



石森博士

石森博士畧歴

明治七年十二月生
同　三十一年十一月第四高等學校醫學部醫科卒業
同　三十二年一月より同年八月迄で同校病理學教室助手として在勤
同　年九月より同年十二月迄福井縣檢疫官奉職
同　三十三年一月より同三十六年二月迄で京都醫科大學生理學助手として在職
同　三十六年二月愛知縣立醫學專門學校教諭に任ぜらる
同　四十三年一月獨國留學を命ぜられ
同　年五月より翌四十四年八月迄でストラスブルグ醫科大學に入り
ホフマイステル教授に就き神經系統及び「グリコゲーン」に關する醫化學を
又たエワールド教授及びギルデマイスター教授に就き神經系統に關する生理學を修め
次で同四十五年八月迄でフランクフルト市ゼンケンベルグ教室に於てエージンゲル氏に就き神經中樞器の解剖を研究し
大正元年九月歸朝
爾來愛知縣立醫專校に於て醫化學及び生理學教授を擔任し
今日に至る
尚今回京都醫科大學に提出したる學位請求論文題左の如し

主論文

一、過極度變縮時ニ於ケル筋肉ノ働作電流ニ就テ（獨文）

參考論文

一、「クリコゲーン」ノ形成及ビ消耗（獨文及邦文）
一、發電魚ノ免電性ニ就テ（邦文）
一、靜脈内ノ外氣吸收ニ就テ（邦文）

學位論文

○學位授與　文部大臣ハ明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條ニ依リ本月十四日左記ノ者ニ學位ヲ授與セリ其學位記及論文審査ノ要旨左ノ如シ（文部省）

學位記

福井縣平民
從六位　石森國臣

右論文ヲ提出シテ學位ヲ請求シ京都帝國大學醫科大學教授會ニ於テ其大學院ニ入リ定規ノ試驗ヲ經タル者ト同等以上ノ學力アリト認メタリ仍テ明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條ニ依リ茲ニ醫學博士ノ學位ヲ授ク

論文審査ノ要旨

超最大變縮ニ伴フ筋働作電流ヲ論ス（獨文）

從來諸家ノ研究ニ種々ノ缺點ヲ認メ著者ハ Kondensator ノ放電ニヨリテ得タル瞬間刺戟及時間刺戟ヲ以テ Rana esculenta 及ヒ歐洲產 Bufo ノ腓腸筋ヲ間接ニ刺戟シ次ノ成績ヲ得タリ

一、瞬間刺戟ニテハ其强度ヲ高ムルモ超最大變縮ヲ得ルコト至難ナリト雖モ時間刺戟ニテハ之ヲ得ルコト甚容易ナリ

二、超最大變縮ニ伴フ筋働作電流ハ之ヲ弦絲電流計ヲ用ヒテ測定スルニ多數（二乃至八）ニ發現シ刺戟電流ノ强度ヲ增スニ從ツテ一層著明トナル尙時間刺戟ニテハ超最大變縮ニ移ラサル以前ニ於テ既ニ多數ノ働作電流ヲ伴フコトアリ

以上論文ハ學術上有益ニシテ石森國臣ハ醫學博士ノ學位ヲ授與セラルヘキ資格アルモノト認定ス

學位記

東京府平民
正七位　兒玉豐治郎

右論文ヲ提出シテ學位ヲ請求シ東京帝國大學醫科大學教授會ニ於テ其大學院ニ入リ定規ノ試驗ヲ經タル者ト同等以上ノ學力アリト認メタリ仍テ明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條ニ依リ茲ニ醫學博士ノ學位ヲ授ク

論文審査ノ要旨

炭疽熱菌ノ先天免疫原理

附「カプセル」ノ成立、本體及其性質（獨逸文）

病原菌中肺炎菌及炭疽熱菌ノ如キハ本來「カプセル」ヲ有ス之レ皆人ノ熟知スル所ナリ而シテ該菌カ如何ナル要約ノ下ニ「カプセル」ヲ形成スルカト云フニ從來ノ學說ニ由リテハ菌カ動物體ニ於テ蕃殖シタル際ニ啻之ヲ證明シ得ルニ留マリ人工培養ニ於テハ全ク不可能事ト見做サレタリ併シ近來液狀血清培養ニ於テモ亦之レヲ達セリト唱フル學者アルニ至レリ然レトモ固形培養ニ於テハ全然之レヲ證明シ得サルハ學者間ノ殆ト定說ナリトス斯ノ如ク其證明ノ範圍ニシテ動搖スルカ故ニ「カプセル」ハ如何ニシテ成立スルカニ就テハ諸說アリテ尙ホ確定セサルハ素ヨリ當然ナリ尙ホ又近來炭疽熱菌カ動物體ニ於テ「カプセル」ヲ形成スルハ其菌カ外敵ニ對スル自家防護裝置ナリト論シ且之レニ由リテ炭疽熱ニ對スル先天免疫ノ原理ヲ解說セントスルノ學者出テタリ

著者ハ「カプセル」ノ研究ニ腐心スル事多年遂ニ肺炎菌ノ「カプセル」ハ人工

培養殊ニ固形培養（「グリセリン」寒天）ニ於テ能ク之ヲ形成スル事實ヲ證明シ且ツ同一理想ノ下ニ炭疽熱菌ノ「カプセル」ヲ攻究シ是レ又固形培養ニ於テ之ヲ證明スルノ事實ヲ擧ケテ前人未發ノ地ヲ拓開シ之レヲ基礎トナシ「カプセル」ノ成立及性質ヲ研究シ更ニ進ンテ炭疽熱菌ノ「カプセル」對先天免疫原理ノ關係ヲ攻究シタリ是本論ノ眼目ニシテ其成績ノ要點ハ次ノ如シ

(1)血清斜面ニ培養シタル炭疽熱菌ヲ採リ健康動物血清一滴ニ混セ之ヲ「デッキ」硝子ニ塗布シテ「カプセル」染色法ヲ行フテ「カプセル」ヲ證明シ其外觀動物體ニ於テ增殖シタル菌力具有スル「カプセル」ト寸毫モ異ナルナキヲ確メ著者ハ續イテ煮沸シテ凝固セシメタル鷄卵白及鷄卵白一ニ對スル普通寒天二若クハ三ノ割合ニ混合煮沸シテ作リタル培養基ニ培養スルモ亦該菌ハ能ク「カプセル」ヲ形成スルコトヲ立證シ此成績ヨリシテ少シク亞兒加里性ヲ高メタランニハ普通ノ寒天ニ培養スルモ亦「カプセル」ヲ形成スルコトナキカノ考ヲ起シ其結果炭疽熱菌ハ酸性及普通寒天（ローソル酸ニ反應スル）ニ培養スルトキハ「カプセル」ヲ形成セルモ若强亞兒加里性寒天（定規曹達液ノ百倍—四百倍液ニ相當スル）ニ培養シ其菌ヲ健康動物血清ノ一滴ト混シ之レヲ「デッキ」硝子ニ塗布シテ「カプセル」染色法ヲ行フトキハ能ク「カプセル」ヲ證明シ得タリ

(2)炭疽熱ニ對シテ感應性ナル家兎及馬ノ血清ハ炭疽熱菌ニ對シテ殺菌作用ヲ呈ス然レトモ同シク感受性ナル「モルモット」牛及南京鼠ノ血清ハ毫モ其性無シ炭疽熱ニ對シテ先天的免疫ナル動物ノ内「ワイセ、ラッテン」ノ血清ハ殺菌作用アレトモ鷄及蛙ノ血清ハ其性皆無ナリ故ニ他ノ學者等ノ所説ト一致シ血清ノ殺菌作用ノ有無ニ由テ炭疽熱ニ對スル動物ノ先天免疫ノ理ハ解説シ得スト説ケリ

(3)寒天培養ノ炭疽熱菌ハ之レヲ各種動物ノ血清ニ培養スルトキハ「カプセル」ヲ形成ス而シテ爰ニ「カプセル」ヲ形成シ始ムル時間ハ寒天ノ性質（即チ亞兒加里度）及移植菌量ニ由テ異ナルトモ之レヲ括約スレハ次ノ如シ即チ免疫動物中啻炭疽熱菌ハ鷄血清ニ於テ五時間ヨリ「カプセル」ヲ形成シ初ム（而シテ「カプセル」ノ幅他ノ動物ノ血清ニ培養シテ形成セル「カプセル」ノ幅ヨリモ非常ニ狹シ）「ワイセ、ラッテン」ノ不動性血清ニ於テ培養二十四時間ニ於テ辛フシテ「カプセル」ヲ形成ス蛙血清ニ於テハ之レヲ形成セス炭疽熱ニ感應性ノ動物中南京鼠及「モルモット」血清ニ於テ炭疽熱菌ハ甚タ能ク「カプセル」ヲ形成（菌ヲ移植シテ二—六時間ヲ經レハ殆ト各菌ニ「カプセル」ヲ認ム）ス又本菌ハ馬ノ働性血清ニ於テハ殺菌セラレ菌體消滅スルカ爲メニ「カプセル」ヲ形成セス然レトモ夫レノ不働性血清ニ於テハ菌ヲ移植後五—二十四時間ノ經過ニ於テ之レヲ著明ニ形成ス牛ノ働性血清ニ於テハ二十四時間ヲ經テ始メテ「カプセル」ヲ形成スルモ不働性血清ニ於テハ已ニ五乃至二十四時間ノ經過ニ於テ著明ニ「カプセル」ヲ形成ス家兎ノ不働性血清ニ於テハ二十四時間ニ於テ辛フシテ「カプセル」ヲ形成ス著者ハ上述ノ實驗ヨリ炭疽熱菌ハ炭疽熱ニ感應性ナル動物ノ血清ニ於テ能ク又免疫動物ノ血清ニ於テハ之レヲ形成セサルハ斷言シ得スト謂ヘリ

(4)寒天培養ノ炭疽熱菌ハ同菌ニ對シテ殺菌性物質ヲ含有スル血清ニ於テハ能ク「カプセル」ヲ形成シ得ス

(5)寒天培養ノ炭疽熱菌カ血清ニ於テ「カプセル」ヲ形成シ初ムル時間ハ破格ハアレトモ概シテ謂ヘハ其菌ノ增殖シ始ムル時間ト同時ナリ即チ牛血清ニ於テハ菌カ增殖シ初メタル後ニ「カプセル」ヲ形成シ始ムルモ之レニ反シテ「モルモット」及南京鼠ノ血清ニ於テハ已ニ二時間ニ於テ著明ニ「カプセル」ヲ形成ス故ニ「カプセル」ヲ形成シ始ムル菌ノ增殖前ナリ從テ菌カ增殖シテ成立シタル若キ菌體ノミカ「カプセル」ヲ形成シタルニ非スシテ血清ニ移植シタル菌自ラモ亦「カプセル」ヲ形成セル事明白ニシテ是レ頗ル興味アル新事實ナリ

(6)寒天培養ノ炭疽熱菌ハ血清ヲ四—六倍ノ割合ニ加ヘタル肉羹汁ニ培養スルトキハ「カプセル」ヲ形成ス然レトモ血清ノ含量夫レヨリ少ナキトキ（稀

釋度ノ高キトキ）ハ之レヲ形成セス

(7)寒天培養ノ炭疽熱菌ハ石炭酸又ハ「フェノールフタレイン」ヲ加ヘタル液狀血清（爰ニハ炭疽熱菌ハ增殖シ得ス）ニ於テ「カプセル」ヲ形成セス

(8)炭疽熱菌ハ上述ノ液狀血清、血清斜面、凝固鷄卵白及著者考按ノ强亞兒加里寒天以外强亞兒加里性肉羹汁ニ於テモ亦「カプセル」ヲ形成ス

(9)炭疽熱菌ハ一方ニハ其菌カ發育ニ適スル南京鼠及「モルモット」血清ニ於テ又他方ニハ發育ニ向テ比較的不適當ナル凝固鷄卵白及强亞兒加里性寒天ニ於テ「カプセル」ヲ形成スル是レ頗ル興味アル點ナリトス

(10)著者ノ檢査ニ依レハ人工的ニ減力シタル炭疽熱菌ヲ普通ノ寒天ニ培養スルモ「カプセル」ヲ形成スト云フ

(11)五%ノ過滿俺酸加里液ヲ以テ殺シタル炭熱疽菌（普通ノ寒天培養）ヲ馬ノ不働性血清ニ浮游シ三十七度ニ二十四時間放置スルトキハ各菌ニ「カプセル」類似ノ像ヲ示スト云フ

(12)「カプセル」形成炭疽熱菌（南京鼠體ヨリ由來スル）生理的食鹽水ニ浮ヘ之レヲ二三—二十四時間十九度以上ノ室溫ニ放置スルトキハ各菌ハ「カプセル」ヲ失ヒ只稀ニ一二ノ菌體ニ於テ「カプセル」ヲ有スルノミ而シ其「カプセル」ハ菌體ノ兩端ニ沿フテ軟弱ナル「ツホーネ」トシテ認ム

(13)無「カプセル」（普通ノ肉羹汁培養）及有「カプセル」菌（液狀ノ血清培養）ノ無菌濾過液其他炭疽熱菌ヲ南京鼠ノ腹腔ニ注射シテ後チ得タル腹腔液ノ無菌液及家兎ノ働性血清ニ由テ殺シタル炭疽熱菌（寒天培養）ハ何レモ南京鼠ニ對シテ毒性作用ヲ呈セス

(14)有「カプセル」菌ハ家兎ノ働性血清ノ殺菌作用ニ對シテ無「カプセル」菌ヨリモ抵抗カ大ナラスシテ寧ロ僅少ナリ

(15)炭疽熱菌ハ蛙「ワイセ、ラッテン」「モルモット」南京鼠及家兎ノ赤血球ヲ一、二日ニシテ溶崩スルノ性アリ然レトモ鷄ノ赤血球ハ一週間ノ後尚ホ溶解セス

(16)蛙ノ血清及腹腔腋ハ炭疽熱菌ニ對シテ殺菌作用ヲ有セス然レトモ此動物ノ血清ハ該菌ノ增殖及「カプセル」ノ形成ヲ阻碍スルノ特性アリ其外蛙ノ體溫ハ炭疽熱菌增殖ヲシテ不良ナラシム然レトモ蛙ノ炭疽熱菌ニ對スル重要ナル防護裝置ハ喰菌作用ニシテ之レニ依リ移植シタル蛙體ニ於テ徐々ニ撲滅セラル

又有「カプセル」炭疽熱菌ヲ蛙體ノ腹腔ニ接種スルニ菌ハ「カプセル」ヲ消失シ其後白血球ヨリ喰菌セラル、カ如シ

(17)鷄ノ血球ハ炭疽熱菌ニ對シテ殺菌作用皆無ナリ而シテ是動物ノ炭疽熱菌ニ對スル先天的免疫ノ理ハ次ナル條件ニ由テ說明シ得ヘシ

（イ）鷄ノ體溫ハ高ク炭疽熱菌ノ增殖ニ向テ不適當ナリ

（ロ）鷄ノ白血球ハ炭疽熱菌ニ對シテ旺盛ナル喰菌作用ヲ呈シ且ツ白血球體內ノ菌消化力ハ强大ナリ

（ハ）鷄ノ白血球ハ炭疽熱菌ノ刺戟ニ由リテ產生スル所ノ無盡藏ナル殺菌性物質アリ之レニ由テ鷄體ニ接種セル無「カプセル」及有「カプセル」性ノ炭疽熱菌ハ甚タ速ニ撲滅セラル、ナリ

又普通寒天培養ノ炭疽熱菌ヲ鷄ノ皮下ニ接種スルニ通常之等接種菌ノ一二カ「カプセル」ヲ形成スルノミ又同一培養菌ヲ此動物ノ腹腔ニ接種スルニ「カプセル」ヲ形成セス然ルニ强亞兒加里性寒天培養ノ炭疽熱菌ヲ鷄ノ皮下ニ接種スルトキハ直ニ美麗ナル「カプセル」ヲ認メ二時間後ニハ復ヒ之レヲ消失ス

(18)「ワイセ、ラッテン」ニ接種シタル菌ハ該動物體ニ於テ無盡藏ニ產生スル殺菌物質旺盛ナル喰菌作用及ヒ白血球內ノ强大ナル菌消化力ニ由リテ撲滅ス故ニ此動物ハ炭疽熱菌ニ對シテ免疫ナル所以ナリ

普通寒天培養ノ炭疽熱菌ヲ「ワイセ、ラッテン」ノ皮下ニ接種スルニ二—五時間ニシテ美麗ナル「カプセル」ヲ形成ス然レトモ再ヒ速ニ消失ス又本動物ノ腹腔ニ本菌ヲ接種スルニ「カプセル」ヲ形成セス

(19)家兎ノ白血球ハ炭疽熱菌（普通寒天培養ノ）ニ對シテ喰菌作用ヲ呈セス此動物ノ血清及腹腔液ハ炭疽熱菌ニ對シテ殺菌作用アリ然レトモ其作用タルヤ家兎ノ働性血清カ試驗管内ニ於テ炭疽熱菌ヲ撲滅スル如ク強大ナルモノニ非ラス

而シテ家兎體ニ接種シタル炭疽熱菌ノ大部分ハ上述ノ殺菌作用ノ爲メニ死滅スルト雖モ一、二ノ菌ハ緻密ナル組織例ヘハ脾臓ニ隱レテ殺菌作用ヲ遁レ無盡藏ニアラサル殺菌物質ノ消失スルヲ俟テ突然ニ且ツ旺盛ニ蕃殖シ之レノ爲メニ家兎ハ死ノ運命ニ捕ハル、ナリ

普通寒天培養ノ炭疽熱菌ハ家兎體ニ於テ南京鼠及「モルモット」體ニ於ケルカ如ク容易ニ「カプセル」ヲ形成シ得ス而シテ炭疽熱菌ノ家兎ニ對スル傳染及「カプセル」形成ノ間ニハ毫厘ノ關係ナク「カプセル」形成ハ炭疽熱菌ノ境遇變化ニ基ク隨伴現象ナリトス

(20)南京鼠ノ血清及腹腔液ハ炭疽熱菌ニ對シテ殺菌作用ヲ有セス然レトモ此動物カ具備スル驚ク可キ旺盛ナル喰菌作用ニヨリテ炭疽熱傳染ニ對シテ抵抗ヲ試ミントス然レトモ悲イ哉喰菌作用ニ由テ把握シタル白血球内ノ菌體ハ「ワイセ、ラッテン」及鷄ノ白血球内ノ夫レノ如ク著明ニ變化セサル程消化力弱キト他方ニハ白血球外ニ殘存スル炭疽熱菌ハ此動物體ニ於テ接種後一、二時間ニシテ喰菌作用ニ對スル防護裝置トシテ「カプセル」ヲ形成シ茲ニ障碍ナク增殖シ動物ハ遂ニ此爲ニ斃ル

南京鼠ニ接種シタル炭疽熱菌（寒天培養）ノ「カプセル」ヲ形成シ始ムル時間ハ接種部位ト接種菌量ト且寒天ノ亞兒加里度トニ由リテ異ナリトス弱酸性寒天培養ノ炭疽熱菌ヲ南京鼠ノ皮下ニ接種スルトキハ通常接種後二時ヨリ「カプセル」ヲ形成シ始メ五時間ニ至レハ著明トナル又弱亞兒加里性寒天培養ノ多量ヲ皮下ニ接種スルトキハ其直後ニ於テ一、二ノ菌體ニ「カプセル」ヲ證明ス又腹腔ニ弱酸性寒天培養ノ多量ヲ接種スルトキハ通常一時半或ハ之レヨリモ稍遲クヨリ「カプセル」ヲ形成シ始メ三—五時間ノ經過ニ於テ其形成著明トナル尙又弱亞兒加里性寒天培養ノ多量ヲ接種スルトキハ直後或ハ十分—三十分—一時間後ヨリ「カプセル」ヲ形成シ始メ二—三時間ノ經過ニ於テ著明ニ現出ス然レトモ若同培養ノ少量ヲ接種スルトキハ三—五—七時間或ハ夫レヨリ以後ニ於テ「カプセル」ヲ形成ス可ク始ム又強亞兒加里性寒天培養ヲ腹腔ニ接種スルトキハ直後ニ於テ殆ト各菌ニ美麗ナル「カプセル」ヲ證明ス

頗ル興味アルハ腹腔ニ於テ增殖シテ成立シタル幼若菌カ「カプセル」ヲ形成スルノミナラス最初ニ接種シタル在來ノ而カモ芽胞ヲ有スル各菌體ニ「カプセル」ヲ認ムル事ナリ

有「カプセル」炭疽熱菌（血清培養ノ）ヲ南京鼠ノ腹腔ニ接種スルトキハ其腹腔液中ニ白血球ノ現出甚タ僅少ニシテ有「カプセル」菌ハ白血球ヨリ喰菌セラレサルヲ以テ其腹腔ニ於テ障碍ナク增殖ス

南京鼠ノ皮下又ハ腹腔ニ接種シタル菌ノ血中ニ達スル時間ハ接種菌量ニ由リテ著シク動搖ス

(21)「モルモット」ノ血清及腹腔液ハ炭疽熱菌ニ對シテ殺菌性ナク又其白血球ヨリ殺菌性物質ヲ產生セス然レトモ此動物ノ白血球ハ喰菌作用（白血球内ノ菌體ハ著シク變形セス）ニ由リテ炭疽熱菌ヲ撲滅セントス而シテ其作用タルヤ腹腔ニ接種シタル四分ノ一寒天斜面培養ト謂フ多量ノ菌ハ接種後二—七時間ノ經過中其腹腔液ヨリ鏡檢ニヨリテモ亦培養ニ由リテモ證明シ得サル程强盛ナリ去レト現今ノ技術ニ由リテハ證明シ得サル程少數ノ菌カ尙ホ生存シ之レカヨリ後ニ「カプセル」ヲ形成シテ喰菌ニ對シ自家ヲ保護シツツ增殖スルカ爲ニ遂ニ動物ハ斃ル、所以ナリ

寒天培養ノ炭疽熱菌ヲ「モルモット」ノ皮下ニ接種スルトキハ二時後ヨリ「カプセル」ヲ形成シ始メ五時間ノ經過ニ於テ其形成著明ト成ル

又有「カプセル」炭疽熱菌ヲ「モルモット」ノ腹腔ニ注射スルトキハ其腹腔液中ニ一—二時ノ後少數ノ白血球出現スルノミニシテ而カモ喰菌作用ナシ從

テ該菌ハ障碍ナク增殖スル常ナリ

其他「モルモット」ノ白血球ハ試驗管內ニ於テ普通寒天培養ノ炭疽熱菌ニ對シテ喰菌作用皆無ナリ然レトモ此白血球「モルモット」ノ働性血清ヲ追加スルトキハ著明ナル喰菌作用ヲ呈ス去レト菌數ハ減少セスシテ其前後ニ於テ差異ナシ

結論ノ要點

(a)炭疽熱菌カ有スル「カプセル」ナルモノハ著者ノ見解ニ依レハ種々ナル約束ノ下ニ菌體ヨリ離開スル菌膜ニシテ「カプセル」タルヤ喰菌作用ニ對スル本菌ノ防護裝置ナレトモ血清ノ殺菌作用ニ對シテハ其效ナシ

(b)炭疽熱菌ニ對スル蛙、鷄及「ワイセ、ラッテン」ノ先天免疫ノ原因ハ上述ノ如ク動物ニ由リテ各異ナリ且各複雜ナル作用ニ由リテ同病原菌ヲ撲滅ス

(c)炭疽熱菌ニ對スル南京鼠「モルモット」及家兎ノ感受性ノ原因ハ各異ナレトモ炭疽熱菌ハ甲乙二動物ニ於テ「カプセル」ヲ形成シ喰菌作用ニ對シテ自家ヲ保護シテ增殖スル爲ナリ然レトモ丙動物ノ感受性ハ「カプセル」ノ形成ヲ以テ解說スルコト能ハス

以上論文ハ學術上有益ニシテ兒玉豐治郎ハ醫學博士ノ學位ヲ授與セラルヘキ資格ヲ有スルモノト認定ス

學位記

東京府平民　正七位　森田齊次

右論文ヲ提出シテ學位ヲ請求シ東京帝國大學醫科大學教授會ニ於テ其大學院ニ入リ定規ノ試驗ヲ經タル者ト同等以上ノ學力アリト認メタリ仍テ明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條ニ依リ茲ニ醫學博士ノ學位ヲ授ク

論文審査ノ要旨

椎骨棘狀突起ノ方向及形狀ヲ定ムル因子ニ就テ(獨逸文)

機關發生ヲ保進スル種々ノ因子アリ|氏ハ之ヲ二種即チ胚芽若クハ機關自己ノ中ニ存スル內因ト其等以外ニ有ル外因トニ分類シ生物ノ或ル發生期期ニハ主トシテ內因ノミ活動シ或ル他ノ時期ニハ外因ノミ又ハ內外共ニ活動スルモノナルコトヲ唱ヘ生物發生ノ時期ヲ理論上四期ニ區別セリ著者ハ此見解ノ上ニ哺乳動物ノ椎骨棘狀突起ノ方向及形狀ヲ定ムル內外因子ヲ檢シ且ツ之ヲ實驗的ニ證明セント試ミタリ

乃チ生後二十八日乃至六十日ヲ經タル體重四百五十乃至九百四十瓦ノ十一尾ノ家兎兒ニ就キ傾斜強キ胸椎ヲ選ヒ左ノ手術ヲ施セリ

第一法　錫鉛送入背部棘狀突起ノ上ニ皮膚ノ縱切開ヲ行ヒ次テ棘狀突起ノ兩側ニ沿フ縱切開ニ由テ筋ヲ遊離シ其レヨリ各棘狀突起間ノ靱帶及筋肉ヲ切除シ終リニ細長キ帶狀ノ錫鉛ヲ波狀ニ送入シ皮膚ヲ縫合シ正規ノ防腐繃帶ヲ施ス(二頭)

第二法　截腱術皮下ニ於テ若クハ皮膚切開後棘狀突起間ノ靱帶ヲ切斷ス

第三法　第一法ノ手術ト同時ニ棘狀突起ノ兩側ニ於テ其レニ附著セル筋ヲ一定區域間可及的充分ニ切除ス術後處置ハ第一法ニ同シ(二頭)

第四法　第二法ノ手術ト同時ニ棘狀突起ノ兩側ニ於テ其レニ附著セル筋肉ヲ一定區域間可及的充分ニ切除ス術後處置ハ前同樣(二頭)

手術セル兎兒中三頭(截腱法二頭錫鉛送入一頭)ハ死亡セリ因テ殘部八頭ニ就テ術後約六箇月ニX線ヲ以テ寫眞シ又十二箇月乃至十四箇月ヲ經テ悉ク屠殺シ椎骨ハ一部ハ晒シ一部ハ顯微鏡標品ト爲シ精細ニ其變化ヲ檢セリ檢査成績ヲ略述スレハ

(一)單ニ靱帶ノ缺損スル場合ニハ棘狀突起ハ强ク頭方ニ彎曲シ(第一乃至第胸椎ニ著明ナリ)傾斜度ハ正規ノ者ヨリ僅カニ强ク尾方ニ傾キ長サハ僅カニ短カク太サハ全體ニ亙ツテ細シ

(二)筋肉ノ缺損スル場合ニハ棘狀突起ノ發育甚タ不良ニシテ傾斜度ハ正規ノ

者ニ比シ著シク尾方ニ傾ク

(三)棘狀突起ハ其レニ附著スル筋肉ノ收縮方向ト同方向ニ彎曲シ彎曲度ハ筋肉ト正比ス

(四)手術ノ際筋肉ノ充分切除セラレサリシ棘狀突起ノ根部ハ其他ノ中央部尖端ノ發育不良ナルニ關ラス正規ノ者ノ如ク發育ス

(五)筋及靱帶ノ切除セラレタル場合ニ於テモ棘狀突起ノ發育ハ停止セス

(六)筋及靱帶ノ切除セラレタル場合ニハ棘狀突起ノ硬固質ハ著シク非薄ト爲リ主トシテ基礎層板ノミヨリ成ル

(七)錫鉛ヲ以テ壓迫セラレタル部分ノ外形ハ萎縮狀態ヲ呈スレトモ硬固質ハ反テ肥厚ス

以上ノ所見ヨリ結論スレハ

(一)筋肉ハ靱帶ヨリハ強ク棘狀突起ノ方向形狀ニ影響ヲ及ホス殊ニ頭方ニ寄レル胸椎ニ於テ著シ靱帶ノ棘狀突起ニ及ホス影響ハ抗抵ノ强弱ニ基ク即チ椎間靱帶及其レニ附著スル筋肉ノ切除ハ棘狀突起自己ニ附著スル筋ノ力ニ對スル抗抵ヲ減スル所以ナレハナリ

(二)棘狀突起ノ發育ハ其尖端ニ新生添加セラルヽニアラスシテ全體ニ發育ス例ヘハ軟骨性棘狀突起ノ根部ハ成長後ノ骨性棘狀突起ノ根部ト爲ル

(三)筋及靱帶即チル—氏ノ機能適應發育ノ因子ヲ去ルモ棘狀突起ハ自己ノ中ニ有スル遺傳性因子（內因）ニ依テ發育ヲ繼續スルモノナリ

(四)生後二十八日ヨリ約十四箇月ノ間ノ發育ハ遺傳性因子ト筋及靱帶ニ基ク外因トニ依リテ營マル故ニ此期間ハル—氏ノ所謂移行期ナリ

(五)基礎層板ノミヨリ成ル硬固質及正規ヨリ尾方ニ傾キタル棘狀突起ノ方向ハ遺傳性ノ造構及方向ナリ

(六)骨ニ加ハル中等度ノ壓迫ハ外形ノ萎縮及實質ノ肥厚ヲ來タス

以上論文ハ學術上有益ニシテ森田齊次ハ醫學博士ノ學位ヲ授與セラルヘキ資格ヲ有スルモノト認ム

通信

●高橋隆三氏通信

大正三年卒業、神戸攝津病院在勤

（前畧）扨而母校出身者の海外發展の地歩を一歩一歩と相進め申す事を得しは迂生の大に喜ぶ處に御座候、早藤氏今や一万噸型の新造船にして大阪商船の誇りとするマニラ丸に「ドクター」と成られ申し大いに狂喜致し居られ候仝氏は東山丸と申す四千噸乃至五千噸の社外船にして大阪商船の借り受けたる船に「ドクター」たられしが仝「チャーター」船は全くポロ船にして「ドクター」の權限範圍も狹少なる船なりしが先づ早藤氏としての處女航海を無事太平洋の狂波怒濤多き期に際してシアトルに航して歸られ此度一躍して一等船に乘込まれしは恰も乞食が一擧して大名となりしと感無んば非ずとは氏自らの喜びの聲に候、氏は今や再び第二回目の航海をシアトル線に採りて洋上米國に走り居られ申し候因みに次ぎの歸港は三月六日の豫定に御座候、

松田氏は相變らずシアトル丸の「ドクター」として其の社交的手腕の呀にを振ひつゝ船長並に本社の信厚く今や大阪商船の數多き「ドクター」中の理想的「ドクター」。模範的「ドクター」と相成られ申し候、因みに氏の船暈病に侵されざるは殆んど先天的にして航路は第一回浦鹽第二回シアトル第三回桑港第四回桑港に仝じく向ひて目下走り居られ申し候、

薗氏は交通丸にして此の船は多少小型の方なれども船は頗る的堅固にしてよく日本海の巨濤に耐ゐ船内も清潔にして「ドクター」の待遇も宜しく浦鹽

及裏日本の諸港を航路とせるが浦塩航路なるため毛唐殊にロスケの多き爲ぬ露語の必要を熟々説き居られ申し候、七尾港の如きは始終寄港せらるゝ事なれば戀しき兼六の地にも時折り足を入れらるゝ事の機會も多からんと存じ候

伊藤兄は相變らず大元氣にて早藤氏のマニラ丸と姉妹船なる布哇丸に乘り居られ目下當港碇泊中に御座候が來る一日香港マニラ方面に解纜するの豫定に御座候仝船は多少機關に故障を生じたる事も御座候が伊藤兄の眼中には斯かる仔細事は更に無く只將來に於ける大志を巨大なる体軀に包藏しつつ朝夕只去來する山の如き怒濤を眼前しつゝ仝兄一流の外交術を振り搖き居らるゝ由に候

以上は商船方面に於ける母校出身船醫諸氏の活動振り否消息の一端を申し上げしまでに候が尚詳細なる通信乃至は視察の實況珍話奇談扨ては赤毛布の數々は今後直接是等諸氏より御便りの事と存じ候

毎度招聘の際は打電等殆んど唐突的に仕り色々御免倒なる難題の御解決を度々煩し申し候等實に吾人感謝の至りに候、尚今後も充分なる御盡力を仰ぎ度く願ひ上げ候吾人社會にありては層一層同窓生の提携と團結とを要するの急を相悟り申し候

今や歐洲の大戰は底止するの期を豫想し得申さず海外に於ける日本の市場は多々增々繁からんと致し日本品の歡迎日本人の歡迎到る所に有之貿易業者海運業者は實に空前絶後の大活氣を呈し居し申し候正に日本人の海外發展の最大好期と思はれ申し候吾人醫人は此時に當り徒らに無事平穩を以て故土に甘んじて萬全を計るよりは海外に渡りて其の術を廣く未開の地に振ひ其の土を浴せしめ海外の邦人を助け延ひて母國を富利し人類の幸福を進むるに玉碎を惜まずと熟々愚考仕り候それには先づ船醫等になるも一策と存じ候因みに船は危險なるものに非ず危險は寧ろ岡の瀛車の方が遙かに統計上多きとの事に候と聞いて小生も腑に落ち申し候

終りに臨みて迂生は是等諸氏が海的に先づ發展せられて得られたる地盤を保持し度く願ひ居り候これには先生の御助力を尚今後も御願ひ申し上げ候本年度卒業生の中村周三氏は大阪の日本海員拔濟會に勤め居られ候が兼て志望なればやがて船に乘らるゝ筈に候

神戸攝津病院内
高橋隆三

●中島理吉氏通信

（大正三年卒業。青森病院在勤）

（前畧）御地は近年稀れなる好天氣の由遙かに向山の空を思ひやり居り候當地方は矢張り何十年目のよき廻りやらにて一月中旬迄は積る程の雪を見ずストーブを中止したる事度々に候

聞く處によれば津輕海峽を洗ふ潮流に一大變化を來せし結果に外ならずとの事に候十日程前より漸々積雪一尺餘雪の青森と相成あらゆる車は皆々橇と化し申候扨て當青森縣立青森病院は大正二年九月十五万の大金を投じて設立醫學博士杉寛一郎氏（現時名古屋醫學專門學校教授）により開院せられたる所にして内、外、眼、産婦、耳鼻、傳染病、齒科の七ツに分科せられ居り候

小生の赴任當時は各科醫長の外醫員僅に五名にして互に手傳致し毎日三百乃至四百の外來一百餘の入院患の治療に忙かしく日を送り申候

かく手數の不足なる處より開腹術にても醫長と醫員（余）二人にて看護婦にナルコーガをやらせ遂行致し居り候次第何事も自然と自分にてやらざるべからざる有樣にてユープンゾには好都合に御座候傳染科は十名を入院せしむべく充分にして醫長ありて獨立致し居り候事感心に候コハ尚青森市に未だ水道の出來ざる以前傳染病流行地なりし爲めに候

當院は各科に別々の試驗室を設けず一般試驗室を設け共通出入致し居り候、醫化學的、細菌的、組織的、檢査器等不充分なから供へられ居り候其他一般治療室の設けありてレントゲン始め「ヂアテルミー」等治療的電氣裝置有之各科より出張運用致し居り候

去る九月院長杉氏名古屋醫專外科部長として轉任相成候

昨年七月以來醫員の增員あり只今にては醫員八名（醫長外）と相成申し候

內　科	二（仙臺出身）	外　科	二（名古屋出一、開試一）
眼　科	一（仙臺出）	耳鼻科	一（仙臺出）
傳染	一（京都出）	產婦人科	一（小生）
齒　科	一（東京齒科醫專）		
藥劑師	三（二ハ仙臺、一ハ開試）		

醫長は年に一度視察出張を醫員は二年に一度視察出張を許され五十圓位の旅費にて目的地は勝手次第に候

院長始め醫員一同晝食時階上食堂に於て相互談笑會食する習慣有之美風と存し候食堂の隣の會議室を借りて「ピンポン」、闘球板あり食後の二時間を樂み申候

看護婦は大正三年四月より本院に於て養成既に第一回卒業生は全部本院に採用せられその多くは寄宿舍に收容せられ居り候醫長及醫員はその講師と云ふ譯にて只今第二回の講習を終らんと致し居り候

其他本院には產婆の講習有之田中舘醫長及小生之れが擔當と相成り居り候實習材料として「フライ、コスト」にて產婦の入院を勸め居り候も應ずる者少く小生の赴任以來僅四名に過きず候

終りに當市には岡本先生と同年の澤田定信氏開業致され有力なるものにて現に當市醫學會長の任にあたり居られ候母校出身者にして衞戍病院には古河？二等軍醫を發見致し候札幌區立病院の岡村重武氏より時々便り之有候

昨年九月なりき大村作太郎氏突然小生を訪問致され候同氏は北海道岩見澤町岩見澤病院に赴任の途中なりし。（後畧）

縣立青森病院　中島理吉

雜　報

圖書月報（其拾八）

醫科四年　南兵太郎

△最近本會の希望を容れ遙かに寄贈せられたる、圖書、並に芳名左の如し。茲に錄して以て滿腔の感謝を表し、永く本會の紀念とせんことを期す。

書名	册數	芳名
各科專門診療醫典（下卷）	一	南山堂書店殿
Die hygienischen Verhältnisse der Insel Formosa	一	高木友枝殿
新撰生理學　三版（下卷）	一	舟岡英之助殿
腺病質及黴毒性疑似肺癆	一	渡邊凞殿

△本會購入書目次の如し。

一、日本內科全書　卷二、（別錄民間藥）。

一、日本醫事雜誌索引　（大正二年分）、

△一月十七日、本會々長醫學博士高安右人閣下より、左記の新聞雜誌を寄贈せらる。本會の爲、例年の御寄贈、厚く感謝する所なり。

一、大日本私立衞生會雜誌　自三八一至三九二（大正四年分）

一、治療藥報　自一一五至一二七（大正四年分）
一、近世醫事　自四ノ一至四ノ一〇（但四、九、欠）（大正元年分）
一、刀圭新報　自六ノ五至六ノ十二、自七ノ一至七ノ四（大正四年分）
一、治療學報　三册（大正三年分）
一、同　仁　十册（自四十一年至四十二年）
一、同　十四册（自大正三年至大正四年）
一、臨床月報　自四七至五八（大正三年分）
一、同　自五九至六九（大正四年分）
一、治療及實驗　十册（自大正三年至大正四年）
一、醫事月報　七册（自四十一年至大正四年）
一、醫海時報　自一〇七一至一一二二（大正四年分）
一、日本之醫界　自一二〇至一五四（大正四年分）

△自大正四年十一月一日至同十二月三十一日閲覧總員千百六十三人也。其内譯左の如し。

	特別	醫四	醫三	醫二	醫一	計
十一月	二八	一一七	一二二	七九	一〇七	五一三
十二月	六	二四八	一三〇	一四〇	一二六	六五〇

△回顧すれば我が十全會圖書室の生れしは、丁度吾人の入學せし年にして、當時は、本校醫化學教室の階上にありて収むる所の書籍誠に微々たるものなりき。爾來各委員の不斷の苦心と努力と多大なる犧牲と、尚先輩諸氏の誘導協賛益々厚きを加へ、寄贈圖書も日々に増加して遂に今日の盛況を見るに至れるなり。今にして其昔を偲べば吾人は更に當事者の苦衷の誠に感謝に餘りあるものたるを信ずるなり。されど先輩の努力尚斯くの如しと雖も未だ充分完成の域に到達せりとは言ふ可らず。更に更に改善發展の餘地尠しとせざるなり。此改善に向ひ先きに多大の犧牲を惜まれざりし村山君の業論に至りては今は措いて言はず更に其後を受けて立たれし橋本學君に至りても又等しく此目的に向ひ絶大なる努力と犧牲とを拂はれしは只厚く感謝して止まざる所なり。則ち同氏は專ら紛糾せる内部の整頓に盡力せられて其第一歩として先づ分完全なる圖書目錄の改正を始め、其他同氏の努力によりて寄贈書目或は購入書籍の著しく増加して一新面目を呈せし事は諸氏の既に認め知る所なり。之れ偏に同氏の手腕に依るに非ずして何ぞや。さはれ、此有望なる良委員も健康勝れざるの故を以て、遂に去らるゝ事となる實に本會の爲痛惜に堪ゆざる所なり。爰に於てか更に熱心なる委員を得る敢て難しとせざりしと雖も、時恰も學期中途にして又、橋本氏の、事業も半にして、尚後進の人に、托する能はず、依て止むなく不肖鈍才をも顧みず臨時其後任となりしなり。かるが故に素より何等の抱負なく、理想もなく、たゞ漫然身だけ圖書室の人となりしに過ぎずして、萬事橋本氏の指導を仰ぎ、然して專ら圖書目錄の完成に急ぎたり。然して今や圖書目錄も完成して、橋本氏の理想の一端も達せられたり、從て不肖の責任も又終へたる如し。依て更に新進氣鋭の垂水氏を得たれば、徒に無爲にして長く留まらんよりはと、年改まると共に、即ち不肖は去れり。大正五年既に我が圖書室も生れてより茲に、五星霜。年々歳々發展の域に向つて進みつゝあるは實に欣喜に堪ゆざる所なり。今や年改まると共に新たに垂水氏を得て更に更に改廓發展の域に向はんとす。圖書室の爲又大に祝福すべし。蓋し進歩必ずしも改革を要せずとするも改革は進歩の一楷梯たりと云ふを得べくんば又新に垂水氏を得たる故なきに非ざるなり。

△最後に擱筆するに當り不肖在任中雜誌部委員諸君の御助力を謝し、就中橋本、内海、紺田の諸兄の多大の御盡力を深謝す。

△尚冬期休暇中本室の事務を執られし内海君の勞を謝す。（了）

叙任及辭令

●内閣

叙從五位　正六位勳四等　鈴木寛之助

叙從六位　正七位勳六等　長井運男

陸叙高等官二等　農商務技師從四位勳三等　野田忠廣

●陸軍省

免本職補關東都督府陸軍々醫長　第六師團軍醫部長陸軍一等軍醫正　野口詮太郎

金澤衛戍病院長陸軍二等軍醫正　村田醇

免本職補第八師團軍醫部長　歩兵第十三聯隊附陸軍一等軍醫　並河權六

依願豫備役仰付

●海軍省

免本職周防乘組被仰付　吳海兵團附海軍中軍醫　萩原忠

●石川縣

依願免職（三月二十四日）　金澤病院皮膚科醫員　内藤頼一

仝　内科第一部醫員　諸橋善三郎

人事

●北村誠吾氏　仝氏（大正三年卒業）は石川縣江沼郡大聖寺の郡立江沼病院の外科に奉職中なりしが此度滋賀縣坂田郡西黒田村大字鳥羽上に自宅開業せられたり。

●田村惣七氏　仝氏（大正四年卒業）は此度紀伊國海原郡加茂橋に開業せらる。

●大前猿次氏　仝氏（大正四年卒業）は是迄神戸市元町四丁目大野醫院にありて研究中なりしが三月二十二日より兵庫縣有馬郡道場村に自宅開業せられたり。

會告

●創立二十五年記念館寄附金第二十回報告

（二月二十二日迄ノ分○印ノモノハ現金領収濟ノ分）

金額	氏名	金額	氏名
一金參圓也	○山際房次郎殿	一金拾圓也	城石健治殿
一金五圓也	○山本貞二郎殿	一金參圓也	北村米三郎殿
一金貳圓也	中谷内善雅殿	一金參圓也	○大中貞治郎殿
一金參拾圓也	○木村孝藏殿	一金貳圓也	○中川久成殿

一金參圓六拾錢也　○第二回分　藥學科第一學年　十八名

勝木　等　三輪作太郎　吉村政一郎　米津秀太郎　長谷川英二
福富　重雄　大和　秀雄　中保　恭一　須並金太郎　伊藤　賢三
藤本光之助　熊取伊太郎　土肥　政藏　上田　寛　山崎　國三
若狹林太郎　海堀福一郎　小西　米助

一金拾九圓八拾錢也　○第二回分　醫學科第二學年　九十九名

赤　申吉　上田　茂　仲井　芳雄　岡田　新作　登谷　次男
守　成一　堀地　四朗　竹中　和一　由利　悅夫　松川甲午郎
飛田喜代治　畠山　正　的場清太郎　宮田太喜男　今田　俊英
西村　順藏　福田　孝　米谷　徹三　川端榮三吉　打田　義芳
藤城　宣三　小西　敬　淺井　實　早川留三郎　高崎　琢男
中村　勝屋　武内宗四郎　北尾　雄馬　相良　摠六　早川　敬藏
河邊　俊吾　伊藤　喜平　中澤午次郎　林　武雄　黑田　收
中山　榮松　上田　成之　永井　省三　柳井　伊義　明瀨　太竝
楠　教惠　堀　政明　寛　一郎　川崎　覺藏　清水友次郎
羽田　昌三　伊東　政外　鈴木外茂治　尾山　友三　中島　鋭雄
垣見　健三　德久　三良　村山　午朔　笹川　竹藏　中西　孚
西村　脩三　南部　典　吉岡　正義　吉岡　勇市　藤江　麗
駒田作兵衛　齋藤　靖　伊達　文次　藤野保太郎　森　謙二
井土　巖　矢崎茂登一　野波　七郎　山中　義信　大村　政一
波々伯部義德　家田　耕三　野々山　茂　岩瀨　信雄　澁谷　碩
大屋　正志　川合　豐　宮崎　宗一　石田　三治　藏　香次郎
津村　一夫　溝口　悌二　藤卷　力雄　前田　信吉　平戸　薬郎
武村　尚　安田勝太郎　吉田　重夫　岩切　一郎　野村　祐之
鎌數　重一　山崎　和雄　石川　濟　宮城　定　吉本　存之
池田德治郎　新居　厚　岡田　美好　武田　守人

計金八拾壹圓四拾錢也

累計金四千百八拾參圓八拾五錢也

▲第十九回報告後現金領收ノ分

一金五圓也　大西　瀨治殿　一金參圓也　久保　襄一郎殿
一金參圓也　松江　意之殿　一金五圓也　增田　貞吉殿
一金壹圓也　田川　益三郎殿　一金五圓也　塚本　政次殿
一金參圓也　茂木　留吉殿　一金參圓也　鈴木　康弐殿
一金五圓也（第一回分）　政山　龍雄殿

以上

廣告

●山碕教授在職二十年祝賀會寄附金第四回報告

（三月十八日迄ノ分×印ハ現金領收濟ノ分）

金額	氏名	金額	氏名
一金五圓也	×林　篤殿	一金參圓也	林　龍門殿
一金五圓也	×西野　宗之殿	一金壹圓也	×穗刈　光平殿
一金壹圓也	×加藤　誠四郎殿	一金壹圓也	若林　定次郎殿
一金壹圓也	川島　俊殿	一金壹圓也	川原　武夫殿
一金壹圓也	×中村　順次殿	一金壹圓也	×岡田　秀造殿
一金貳圓也	×大井　逸雄殿	一金五圓也	大月　齊庵殿
一金參圓也	熊澤　清隆殿	一金壹圓也	×山本兵三郎殿
一金壹圓也	×後藤　鈴松殿	一金五圓也	×佐口　榮殿

一金壹圓也　×佐伯亮齊殿　一金壹圓也　×北川勝末殿　一金貳圓也　加藤靜雄殿　一金貳圓也　金子治郎殿
一金參圓也　×溝淵進馬殿　一金貳圓也　×島田吉三郎殿　一金壹圓也　上出正男殿　一金壹圓也　神内甚六殿
一金貳圓也　白井濟殿　一金貳圓也　×森田信雄殿　一金貳圓也　河島松太郎殿　一金貳圓也　鹿江佐六殿
一金參圓七拾錢也　加藤信智殿　吉野巖殿　安藤信次殿　一金參圓也　加藤尙志殿　一金壹圓也　鹿野重太郎殿
安達友直殿　若林善太郎殿　高橋直作殿　一金壹圓也　金森順劑殿　一金壹圓也　河崎爲直殿
河原芳長殿　窪田小市殿　一金壹圓也　川村二郎殿　一金貳圓也　金子太須計殿
計金五拾壹圓七拾錢也　一金壹圓也　吉田宗一殿　一金貳圓也　米村吉太郎殿
累計金壹千八百四拾五圓七拾錢也　一金壹圓也　吉田貢殿　一金壹圓也　吉井康次郎殿
▲第三回申込報告後現金領收ノ分　一金壹圓也　池田蔆吉殿　一金壹圓也　今井外吉殿　一金參圓也　田川益三郎殿　一金壹圓也　高橋甚一殿
一金壹圓也　井上耕也殿　一金壹圓也　伊藤二郎殿　一金貳圓也　高澤甚作殿　一金拾圓也　建部鈴次郎殿
一金參圓也　石坂伸吉殿　一金參圓也　池原康造殿　一金壹圓也　竹内三次殿　一金壹圓也　田原利崇殿
一金貳圓也　稻坂清八殿　一金壹圓也　石川清殿　一金壹圓也　高辻喜作殿　一金壹圓也　塚本政次殿
一金參圓也　井上豐作殿　一金壹圓也　生駒廣太郎殿　一金壹圓也　橋良支殿　一金貳圓也　武内清作殿
一金五圓也　石川支知殿　一金貳圓也　長谷川恒次殿　一金壹圓也　土田淳之助殿　一金參圓也　中村欣一郎殿
一金貳圓也　林豐丈殿　一金參圓也　林常雄殿　一金貳圓也　内藤三太郎殿　一金貳圓也　中川久成殿
一金壹圓也　長谷川葛殿　一金參圓也　原田悅五郎殿　一金參圓也　中島郁夫殿　一金壹圓也　中村周三殿
一金貳圓也　英軒二殿　一金貳圓也　花岡佐太郎殿　一金壹圓也　内藤隆治殿　一金壹圓也　中村左吉郎殿
一金壹圓也　原樸平殿　一金壹圓也　林謹一殿　一金壹圓也　中村義忠殿　一金壹圓也　内藤榮治殿
一金壹圓也　堀正平殿　一金貳圓也　波々伯部重隆殿　一金參圓也　村本笹次郎殿　一金壹圓也　村上準次郎殿
一金壹圓也　蠶茂殿　一金貳圓也　土肥章司殿　一金壹圓也　牛塚榮太郎殿　一金壹圓也　尾倉一英殿
一金壹圓也　戸谷慈一殿　一金參圓也　富田敦貴殿　一金參圓也　小倉脩平殿　一金壹圓也　小幡一志殿
一金壹圓五拾錢也　富田直殿　一金五圓也　土岐文二郎殿　一金壹圓也　生沼曹六殿　一金壹圓也　小田善壽殿
一金參圓也　中條俊夫殿　一金壹圓也　額又太郎殿　一金六圓也　大谷顯治殿　一金壹圓也　尾島政憲殿
一金參圓也　渡孚貞殿　一金壹圓五拾錢也　渡邊常三郎殿　一金貳圓也　桑原才三郎殿　一金貳圓也　久保田保治殿
一金貳圓也　河崎規矩殿　一金拾圓也　影山清美殿　一金貳圓也　松村銹二殿　一金壹圓也　山口茂太郎殿
　　松王數男殿　一金五圓也　眞澤貞一殿

一金壹圓也　前川孝之殿
一金壹圓也　町原光熙殿
一金貳圓也　眞澤七三郎殿
一金壹圓也　松生哲良殿
一金拾圓也　計見雄藏殿
一金壹圓也　布施宗一殿
一金貳圓也　藤崎榮吉殿
一金五圓也　藤井伊之吉殿
一金壹圓也　後藤與五郎殿
一金壹圓也　小島達三殿
一金壹圓也　東義雄殿
一金壹圓也　芦澤孝治殿
一金壹圓也　青木芳彦殿
一金參圓也　旭憲吉殿
一金五圓也　佐々木秀司殿
一金參圓也　栢原直次郎殿
一金壹圓也　坂井清殿
一金貳圓也　佐々章哲殿
一金壹圓也　佐々木文三殿
一金貳圓也　北川健三殿
一金壹圓也　南茂吉殿
一金五圓也　三木三郎殿
一金壹圓也　宮川熊三郎殿
一金五圓也　進士武群殿
一金拾圓也　日野信次殿
一金壹圓也　平手秀敏殿
一金壹圓也　松井甚四郎殿
一金貳圓也　松江意之殿
一金貳圓也　萬田亞雄殿
一金貳圓也　馬庭駿一郎殿
一金參圓也　古屋與三殿
一金壹圓也　福田美明殿
一金壹圓五拾錢也　藤井一雄殿
一金壹圓也　小出貞次郎殿
一金壹圓也　子安賴義殿
一金壹圓也　江藤晝時殿
一金五圓也　足立健三郎殿
一金參圓也　有馬守重殿
一金五圓也　安達信彥殿
一金壹圓也　佐々城清臣殿
一金貳圓也　酒井政吉殿
一金壹圓也　崎山敏雄殿
一金壹圓也　榊原久殿
一金壹圓也　坂上作平殿
一金貳圓也　絹川義溫殿
一金壹圓也　北川文松殿
一金貳圓也　宮田篤郎殿
一金壹圓也　宮崎億重殿
一金貳圓也　柴田耕一殿
一金壹圓也　重光蔭殿
一金壹圓也　日比明殿
一金壹圓也　森川脩殿
一金五圓也　諸角友平殿
一金壹圓也　鈴木修一郎殿
一金壹圓也　鈴木信友殿
一金五圓也　杉本兵太殿
一金參圓也　鈴木重吉殿
一金參圓也　杉原幹男殿
一金貳圓也　住田立殿
一金參圓也　杉本捨六殿
一金壹圓也　鈴木伊作殿

以上

●山碕教授在職二十年祝賀會寄附金報告正誤表

回數	頁	行	誤	正
一	三七	一九	金壹圓也　林豐丈殿　金貳圓也	林豐丈殿
一	四〇	一	金壹圓也　藤彌博殿　死亡削除	
二	二四	一二	金壹圓也　加藤鍬作殿　重復削除	
二	二四	一三	金五圓也　梶川甚一殿　金貳圓也	梶川甚一殿
二	二七	二一	金八百九拾貳圓也	金八百八拾八圓也
二	二七	二二	金壹千六百八拾參圓五拾錢也	金壹千六百七拾九圓五拾錢也
三	二九	一三	金壹千七百九拾八圓也	金壹千七百九拾四圓也

●上田教授在職記念品贈呈醵金第四回報告

金額	氏名	金額	氏名
一金參拾圓也	木村孝藏殿	一金壹圓也	岡島敬治殿
一金壹圓也	金子治郎殿	一金壹圓也	村本笹次郎殿
一金貳圓也	野島茄三郎殿	一金貳圓也	大井精殿
一金壹圓五拾錢也	奥山義盛殿	一金壹圓也	松田茂殿
一金壹圓也	高口安太郎殿	一金壹圓也	喜多禎次殿
一金拾圓也	河崎有作殿	一金壹圓也	芦澤孝治殿

一金壹圓也　青木市次郎殿　一金壹圓也　青木國三郎殿
一金壹圓也　石橋四郎殿　一金貳圓也　岡田秀造殿
一金壹圓也　岡　忍殿　一金壹圓也　加瀨順之助殿
一金壹圓也　北川文松殿　一金壹圓也　北村裕壽殿
一金壹圓也　窪美一久殿　一金壹圓也　來間隆次殿
一金壹圓也　谷澤一郎殿　一金壹圓也　中條俊夫殿
一金壹圓也　戸谷慈一殿　一金壹圓　長井運男殿
一金壹圓也　西　勝人殿　一金壹圓也　根布定吉殿
一金貳圓也　日野信次殿　一金壹圓也　福田美明殿
一金壹圓也　牧　良一殿　一金壹圓也　政山龍雄殿
一金壹圓也　村尾純昌殿　一金壹圓也　山際房次郎殿
一金壹圓也　吉井康次郎殿　一金壹圓也　吉田　貢殿
一金壹圓也　大井逸男殿　一金壹圓也　松本桃道殿
一金壹圓也　神内甚六殿　一金壹圓也　小出隆治殿
一金參圓也　永江直之殿　一金壹圓也　野手雅信殿
一金參圓也　石黑傳六殿　一金壹圓也　臼井順太郎殿
一金壹圓也　堀田文造殿　一金壹圓也　大島　時殿
小計金九拾貳圓五拾錢也
總計金六百拾九圓五拾壹錢也
第壹回報告中井上只次殿ノ金貳圓ハ壹圓ノ誤リニツキ訂正ス

金子博士在職參拾年祝賀會趣意書

金澤醫學專門學校教授醫學博士金子治郎氏ハ明治十八年十二月大阪醫學校教諭ニ任ゼラレ次デ明治廿九年八月金澤醫學專門學校教授ニ轉任セラレ今日ニ至ル迄前後參拾有餘年間子弟ヲ薫陶シテ倦マズ學理ヲ研讃シテ怠ラズ學德共ニ中外ノ瞻望スル所ナリ茲ニ生等相計リ來ル十月ヲ期シ左記ノ方法ニヨリテ在職參拾年祝賀式ヲ擧行シ且銅像ヲ建設シテ氏ノ高風ヲ永ヘニ傳ヘント欲ス希クハ大方有志ノ諸君奮テ御賛同アラン事ヲ

一、金子博士ノ銅像ヲ本校内ニ建設シ（銅像建設費ハ大凡貳千圓ノ見込）且紀念品ヲ大阪醫科大學ニ寄附スルコト

二、大正五年十月中ニ祝賀式ヲ行ヒ教授及御家族ヲ招待シ且銅像除幕式ヲ擧行ス

式　場　金澤醫學專門學校大講堂
期　日　確定次第御通知致スベシ

三、右費用ニ充テン爲メ普ク寄附金ヲ募集ス其金額一口壹圓以上ノコト

四、寄附金申込　大正五年四月十五日迄ニ金澤醫學專門學校解剖學教室金子博士在職參拾年祝賀會事務所宛申込ノコト

五、寄附金拂込　大正五年四月三十日迄ニ振替口座大阪參〇〇六七番金澤醫學專門學校佐口榮宛拂込ノコト

六、領收　寄附者ニハ領收書ヲ發送ス尙芳名簿ハ之レヲ金子博士ニ呈シ且ツ十全會誌上ニ發表ス

七、銅像設計其他一切ノ事務ハ發起人中委員ニ一任スルコト

大正五年二月

祝賀會委員長　下平用彩
同　副委員長　櫻根孝之進
同　上松原三郎

發起人（イロハ順〇印ハ委員）

〇伊藤又吉　井上元　今越理作　池田菱吉　石澤太作

○石川　寛二　石川　喜直　○石川　精一　石黒　四郎　石坂　伸吉
石森　國臣　飯森益太郎　林　龍門　林　常雄　○林　篤
林　喜久松　濱地藤太郎　橋本監次郎　西原愛太郎　堀見　克禮
細田　榮　本田　三郎　○時國　恒夫　○富田　豐咲　土肥　章司
千葉　玄也　沼田　準三　小幡　龜壽　太田　精一　岡　忍
○岡部　博　岡田　剛吉　岡島　敬治　岡本京太郎　○岡本規矩男
○奥山　義盛　沖野瀰一郎　荻野　純三　表　宣明　○若林定次郎
○若林善太郎　和田　豐種　鷲山　謙吉　加藤　慶三　○加藤　信智
加藤　寛　加藤　靜雄　○加藤誠四郎　○河原　芳長　○川原　武夫
河野　徹志　河崎　有作　○川島　俊　片瀬　淡　影山　清美
梶川　靜夫　米村吉太郎　吉尾　開道　吉村　一馬　○吉野　巖
館　保二　○高橋　直作　高安　右人　高澤　冠一　○田中一次郎
田中　信一　竹多乙三郎　津川　恒　塚本　政次　辻本辰之助
内藤三太郎　長雄　勝馬　中野鑄太郎　○那谷　與一　並河　正雄
村上　庄太　村田金太郎　上田　計二　上野辰太郎　野村　亮吉
能木場與三吉　久保　武　○窪田　小市　窪美　良　栗田　昇
○栗山光太郎　藏光長次郎　熊澤　清隆　山田　義忠　○山崎　重治
○山本兵三郎　山本　直枝　松王　敷男　松田外次郎　○松田　茂
松井　清輝　松井　宣正　馬詰　定衛　鳳澤　貞一　正井　保良
增本誠一郎　毛戸　四郎　深美貞之助　福岡　喜洋　福士　政一
藤岡　孫喜　○小池　才一　小西　俊三　兒玉豐治郎　國分　金城
子安　賴義　小島　佐藏　○近藤　時男　○近藤　清吾　江藤　潤一
寺本　義一　青木　正枝　○安達　友直　芥川　信　淺井　貞準
○安藤　信次　○佐伯　義久　佐藤邦次郎　酒井　政吉　佐竹　秀一
○佐口　榮　○伊崎　伊久　佐々城清臣　佐々木茂樹　北　豐吉
○北川　勝末　北川　健三　道本　教二　宮田　篤郎　三木　三郎
○三木　榮末　○柴野　順吾　柴山　金雄　壜村和喜男　島　誠郁
島田吉三郎　清水　李平　樋口　平次　飛見　丈繁　諸橋善三郎
諸角　友平　○森田　隼三　森田　齊次　森島　彦夫　須藤　憲三
鈴木寛之助　學生一同

●金子博士在職參拾年祝賀會寄附金申込第二回報告

金額	氏名	金額	氏名
一金拾圓也	下平　用彩殿	一金拾圓也	櫻根孝之進殿
一金拾圓也	森田　齊次殿	一金拾圓也	和田　豐種殿
一金拾圓也	上田　計二殿	一金拾圓也	並河　正雄殿
一金拾圓也	西原愛太郎殿	一金拾圓也	久保　武殿
一金拾圓也	島田吉三郎殿	一金拾圓也	堀見　克禮殿
一金拾圓也	大谷幾三郎殿	一金五圓也	竹多乙三郎殿
一金九圓也	米村吉太郎殿	一金九圓也	飯森益太郎殿
一金五圓也	柴山　金雄殿	一金五圓也	松王　敷男殿
一金五圓也	諸角　友平殿	一金五圓也	飛見　丈繁殿
一金五圓也	岡田　剛吉殿	一金五圓也	福原　義柄殿
一金五圓也	河野　徹志殿	一金五圓也	栗田　昇殿
一金五圓也	石川　支知殿	一金九圓也	影山　清美殿
一金五圓也	石川　喜直殿	一金五圓也	長雄　勝馬殿
一金五圓也	小幡　龜壽殿	一金五圓也	鈴木文太郎殿
一金五圓也	中島　久殿	一金五圓也	山田　泰二殿
一金五圓也	島　秀殿	一金五圓也	稻坂　清八殿
一金五圓也	笹田　順二殿	一金九圓也	松村　四郎殿
一金參圓也	岡本京太郎殿	一金參圓也	舘　保二殿
一金參圓也	島　誠郁殿	一金參圓也	石森　國臣殿
一金參圓也	寺本　義一殿	一金參圓也	馬詰　定衛殿
一金參圓也	高安　右人殿	一金參圓也	眞澤　貞一殿
一金參圓也	國分　金城殿	一金參圓也	森島　彦夫殿

一金參圓也　鈴木寛之助殿
一金參圓也　沖野瀾一郎殿
一金參圓也　村上庄太殿
一金參圓也　林龍門殿
一金參圓也　市村塘殿
一金參圓也　明石種次郎殿
一金參圓也　生沼曹六殿
一金參圓也　島田靜男殿
一金貳圓也　梶川靜夫殿
一金貳圓也　加藤靜雄殿
一金貳圓也　松田外次郎殿
一金貳圓也　池田蓼吉殿
一金貳圓也　山本直枝殿
一金貳圓也　野村亮吉殿
一金貳圓也　毛戸四郎殿
一金貳圓也　太田精一殿
一金貳圓也　橋本監次郎殿
一金貳圓也　岡忍殿
一金貳圓也　福士政一殿
一金貳圓也　松井宣正殿
一金貳圓也　佐々木茂樹殿
一金貳圓也　塚本政次殿
一金貳圓也　藤岡孫喜殿
一金貳圓也　石坂伸吉殿
一金貳圓也　上原秀三殿
一金貳圓也　武田久米藏殿

一金參圓也　窪美良殿
一金參圓也　福岡喜洋殿
一金參圓也　三木三郎殿
一金參圓也　佐々木達殿
一金參圓也　難波成喜殿
一金參圓也　河村純達殿
一金貳圓五拾錢也　岡崎虎次郎殿
一金參圓也　松江意之殿
一金貳圓也　林常雄殿
一金貳圓也　子安賴義殿
一金貳圓也　石黑四郎殿
一金貳圓也　辻本辰之助殿
一金貳圓也　北川健三殿
一金貳圓也　鷲山謙吉殿
一金貳圓也　津川恒殿
一金貳圓也　千葉玄也殿
一金貳圓也　細田榮殿
一金貳圓也　土肥章司殿
一金貳圓也　深美貞之助殿
一金貳圓也　荻野純三殿
一金貳圓也　濱地藤太郎殿
一金貳圓也　須藤憲三殿
一金貳圓也　小島佐藏殿
一金貳圓也　兒玉豐治郎殿
一金貳圓也　山田孝太郎殿
一金貳圓也　神野勇太郎殿

一金貳圓也　桂田富士郎殿
一金貳圓也　村田太次郎殿
一金貳圓也　物部定曹殿
一金貳圓也　宮崎正殿
一金貳圓也　石丸桂殿
一金貳圓也　神山慶敎殿
一金貳圓也　中正純殿
一金貳圓也　芳村岸太郎殿
一金貳圓也　岡野珠之助殿
一金貳圓也　天兒民惠殿
一金貳圓也　小笠原大成殿
一金貳圓也　五百藏致一殿
一金貳圓也　前防玄貫殿
一金貳圓也　西村德太郎殿
一金貳圓也　加藤和一郎殿
一金貳圓也　足立庸四郎殿
一金貳圓也　太田勘市殿
一金貳圓也　金子太須計殿
一金貳圓也　後藤義質殿
一金貳圓也　高岡榮殿
一金貳圓也　高田文齊殿
一金貳圓也　今井潔殿
一金貳圓也　轟茂殿
一金貳圓也　中川久成殿
一金貳圓也　長廻善吉殿
一金貳圓也　日野信次殿

一金貳圓也　得田易殿
一金貳圓也　小屋光雄殿
一金貳圓也　小林基太郎殿
一金貳圓也　清水恒太郎殿
一金貳圓也　西井梅太郎殿
一金貳圓也　田中德次郎殿
一金貳圓也　清水仲次郎殿
一金貳圓也　石田彪殿
一金貳圓也　莊豐之助殿
一金貳圓也　阪田鼎殿
一金貳圓也　横山忠彦殿
一金貳圓也　上村平作殿
一金貳圓也　高井盛策殿
一金貳圓也　生駒圓殿
一金貳圓也　竹浪富助殿
一金貳圓也　今村鉄夫殿
一金貳圓也　大井良一郎殿
一金貳圓也　久津木勝作殿
一金貳圓也　澁谷孝慶殿
一金貳圓也　高松岩吉殿
一金貳圓也　須田嘉三郎殿
一金貳圓也　今井篤殿
一金貳圓也　成田成治殿
一金貳圓也　中原重吉殿
一金貳圓也　橋本喜久三殿
一金貳圓也　東義雄殿

一金貳圓也　古屋榮治殿
一金貳圓也　福里次吉殿
一金貳圓也　松田研吉殿
一金貳圓也　宮城篤珍殿
一金貳圓也　山脇泰治殿
一金貳圓也　宮本品太郎殿
一金貳圓也　大中貞治郎殿
一金壹圓五拾錢也　小西俊三殿
一金壹圓五拾錢也　加藤慶三殿
一金壹圓五拾錢也　田村惣七殿
一金壹圓五拾錢也　村山三男三郎殿
一金壹圓壹錢也　北村信定殿
一金壹圓也　本田三郎殿
一金壹圓也　上野辰太郎殿
一金壹圓也　石譯太作殿
一金壹圓也　道本教二殿
一金壹圓也　今越理作殿
一金壹圓也　佐々城清臣殿
一金壹圓也　佐竹秀一殿
一金壹圓也　熊澤清隆殿
一金壹圓也　淺井貞準殿
一金壹圓也　酒井政吉殿
一金壹圓也　芥川信殿
一金壹圓也　三木榮末殿
一金壹圓也　松本繁正殿
一金壹圓也　井上鍬吉殿

一金貳圓也　藤井最正殿
一金貳圓也　松村魁殿
一金貳圓也　南茂吉殿
一金貳圓也　森田信雄殿
一金貳圓也　吉井康次郎殿
一金貳圓也　谷藤吉殿
一金貳圓也　七五三龜吉殿
一金壹圓五拾錢也　內藤三太郎殿
一金壹圓五拾錢也　表宣明殿
一金壹圓五拾錢也　朝倉重敏殿
一金壹圓壹錢也　廣野誠一郎殿
一金壹圓也　能木場與三吉殿
一金壹圓也　北豐吉殿
一金壹圓也　鹽村和喜男殿
一金壹圓也　佐藤邦次郎殿
一金壹圓也　增本誠一郎殿
一金壹圓也　高澤冠一殿
一金壹圓也　樋口平次殿
一金壹圓也　諸橋善三郎殿
一金壹圓也　吉村一馬殿
一金壹圓也　吉尾開道殿
一金壹圓也　田中信一殿
一金壹圓也　井上元殿
一金壹圓也　村田金太郎殿
一金壹圓也　生駒廣太郎殿
一金壹圓也　杉原幹男殿

一金壹圓也　大澤五月殿
一金壹圓也　上原菊太郎殿
一金壹圓也　駒井德太郎殿
一金壹圓也　高橋周而殿
一金壹圓也　吉村政行殿
一金壹圓也　山瀨時吉殿
一金壹圓也　藤田安平殿
一金壹圓也　鈴木基殿
一金壹圓也　長谷部浩殿
一金壹圓也　小林七朗殿
一金壹圓也　上田榮殿
一金壹圓也　安澤佐一殿
一金壹圓也　塚口積太郎殿
一金壹圓也　斯波芳雅殿
一金壹圓也　樋口勇三郎殿
一金壹圓也　林秀藏殿
一金壹圓也　寺井健次郎殿
一金壹圓也　高橋秋朔殿
一金壹圓也　橋爪信三郎殿
一金壹圓也　下河邊三郎殿
一金壹圓也　谷本精一郎殿
一金壹圓也　上森壽殿
一金壹圓也　池田武久殿
一金壹圓也　渡邊松太郎殿
一金壹圓也　久保山高敏殿
一金壹圓也　赤倉喜久雄殿

一金壹圓也　高橋善三郎殿
一金壹圓也　八波則吉殿
一金壹圓也　赤井直好殿
一金壹圓也　金田鬼一殿
一金壹圓也　上村茂次郎殿
一金壹圓也　窪井義作殿
一金壹圓也　駒田慶之吉殿
一金壹圓也　小田佐人殿
一金壹圓也　村上彥夫殿
一金壹圓也　高見葛陽殿
一金壹圓也　松本貞二郎殿
一金壹圓也　永井豐殿
一金壹圓也　岡本富士太郎殿
一金壹圓也　福家巖殿
一金壹圓也　林陸馬殿
一金壹圓也　別府禎三郎殿
一金壹圓也　松井義邦殿
一金壹圓也　蒲池四方之助殿
一金壹圓也　三好楠三郎殿
一金壹圓也　北垣小三郎殿
一金壹圓也　三村慶藏殿
一金壹圓也　磯野雄馬殿
一金壹圓也　大西竹藏殿
一金壹圓也　渡邊義人殿
一金壹圓也　園田修一殿
一金壹圓也　安積鼎殿

一金壹圓也　青木市次郎殿
一金壹圓也　青木國三郎殿
一金壹圓也　井上只次殿
一金壹圓也　池田敬一殿
一金壹圓也　石川元良殿
一金壹圓也　石川清次殿
一金壹圓也　宇佐美保之殿
一金壹圓也　太田長作殿
一金壹圓也　小野醇吉殿
一金壹圓也　奥山正雄殿
一金壹圓也　小幡一志殿
一金壹圓也　太田喜作殿
一金壹圓也　神坂勇治殿
一金壹圓也　加藤錠吉殿
一金壹圓也　鎌尾万明殿
一金壹圓也　木谷義太郎殿
一金壹圓也　北村誠吾殿
一金壹圓也　桐田健三郎殿
一金壹圓也　久保襄一郎殿
一金壹圓也　窪美一久殿
一金壹圓也　久高唯忠殿
一金壹圓也　楠野末太郎殿
一金壹圓也　小島顯治殿
一金壹圓也　齊藤賢德殿
一金壹圓也　齊藤房治殿
一金壹圓也　齊藤友一殿

一金壹圓也　新次郎吉殿
一金壹圓也　池田耕殿
一金壹圓也　石橋四郎殿
一金壹圓也　今井外吉殿
一金壹圓也　池浦渡殿
一金壹圓也　上木隆基殿
一金壹圓也　太田他計作殿
一金壹圓也　尾倉一英殿
一金壹圓也　長村吉太殿
一金壹圓也　長田八三郎殿
一金壹圓也　荻野鶴治殿
一金壹圓也　大谷顯治殿
一金壹圓也　鎌田勘之助殿
一金壹圓也　加藤健之助殿
一金壹圓也　川崎盛道殿
一金壹圓也　北川文松殿
一金壹圓也　北村米三郎殿
一金壹圓也　桑折直殿
一金壹圓也　黑田眞岳殿
一金壹圓也　栗林信殿
一金壹圓也　栗本保身殿
一金壹圓也　久保井末造殿
一金壹圓也　小池勇助殿

一金壹圓也　齊藤喜之吉殿
一金壹圓也　清水秀夫殿
一金壹圓也　重田稔殿
一金壹圓也　鈴木彌殿
一金壹圓也　住田立殿
一金壹圓也　關根平殿
一金壹圓也　竹松衛殿
一金壹圓也　高田茂一殿
一金壹圓也　田口泰殿
一金壹圓也　竹園圓隆殿
一金壹圓也　駿河尚庸殿
一金壹圓也　淺井勳殿
一金壹圓也　浦晴二殿
一金壹圓也　勝谷德三郎殿
一金壹圓也　戸谷慈一殿
一金壹圓也　德久恒治殿
一金壹圓也　德茂隆殿
一金壹圓也　中條俊夫殿
一金壹圓也　中川善松殿
一金壹圓也　丹羽玄純殿
一金壹圓也　西野宗之殿
一金壹圓也　花岡佐太郎殿
一金壹圓也　馬場庄江殿
一金壹圓也　平泉泰雄殿
一金壹圓也　平手秀敏殿
一金壹圓也　藤井助雄殿

一金壹圓也　重本儀助殿
一金壹圓也　城石健治殿
一金壹圓也　島豐喜殿
一金壹圓也　鈴木忍殿
一金壹圓也　千田常外殿
一金壹圓也　田代保二殿
一金壹圓也　田山退一殿
一金壹圓也　田中精一殿
一金壹圓也　竹松常雄殿
一金壹圓也　田尻秀雄殿
一金壹圓也　鈴木修一郎殿
一金壹圓也　井澤篤治殿
一金壹圓也　角田耕六殿
一金壹圓也　富田敦貴殿
一金壹圓也　富田直殿
一金壹圓也　堂坂友作殿
一金壹圓也　中島誠殿
一金壹圓也　中西島吉殿
一金壹圓也　中谷內義雄殿
一金壹圓也　西村貞俊殿
一金壹圓也　林義輔殿
一金壹圓也　萩野茂次郎殿
一金壹圓也　馬場稠殿
一金壹圓也　平野鄉治郎殿
一金壹圓也　廣瀨竹次郎殿
一金壹圓也　伏田金三殿